

【 復活のトロパリ 第2調 】

し せ ぎ る い の ち よ 、 な ん ぢ し に く だ り し
 死 生 命 爾 死 降

と お き 、 か み の せ い の ひ か り に て ぢ ご
 時 神 性 光 地 獄

く を こ ろ せ え り 。 し せ し も の を ち か よ
 殺 死 者 地 下

り ふ く か つ せ し め し と お き 、 て ん ぐ ん み な
 復 活 時 天 軍 皆

よ び て い え え り 、 い の ち を た も う し ゆ
 呼 曰 生 命 賜 主

ハ リ ス ト ス わ が か み よ 、 こ う え い は な ん ぢ に
 吾 神 光 榮 爾

き い す 。
 歸

【 蕩児のコンダク 第3調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

ま も い つ も よ よ お に ア ミ ン。
 何 時 世 世

わ れ む ち に し て ち ち た る な ん ぢ の こ う え い に と
 我 無 知 父 爾 光 榮 遠

おざかり、なんぢがわれにたくせしとみを、
 爾 我 託 富
 あくのうちについやせえり。ゆえにとうし、
 悪 中 費 故 蕩 児
 のこえをなんぢにささあぐ、こうおんなる
 声 爾 捧 洪 恩
 ちちよ、われなんぢのまえにつみをえたあ
 父 我 爾 前 罪 獲
 り、つうかいするわれをいれて、なんぢが
 痛 悔 我 納 爾
 やといびとのひとりのごとく、なしたあ
 傭 人 一 如 爲 給
 まあえ。

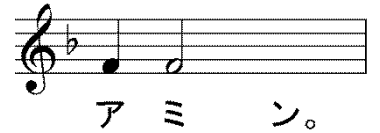
司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしよう} 聖者の中に息い、^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} セラフィムより讃榮せられ、^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} ヘルヴィムより讃榮せられ、^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 悉くの天軍より伏拜せられ、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} 萬物を無より有となし、^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} 人を爾の像と肖とに依りて造り、^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} 爾が諸の賜を以て之を飾り、^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 願う者に智慧と明悟とを與え、^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 罪を行う者を棄てずして、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} 其救の爲に痛悔を立て、^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} 此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者となし、^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} 親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 爾の仁慈を以て我等に臨み、^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} 我が靈と體と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

しょうしんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖なる神 聖なる勇毅 聖
じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
常生者 我等 憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖なる神 聖なる勇毅 聖
なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
常生者 我等 憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖なる神 聖なる勇毅
せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
聖常生者 我等 憐
れめよ。こうえいはちちとことせいしん
光榮 父子 聖神
にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸 今 何時 世世

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等
 あわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第2調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅはわがちから、わがうたなり、かれはわ
 主 我 力 我 歌 彼 我
 がすくいとなれり。
 救

誦經) 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我
 が す く い と な れ り 。
 救

誦經) ^{しゅ わ ちから わ うた} 主は、我が力、我が歌なり、

か れ は わ が す く い と な れ り 。
 彼 我 救

【 使徒經 (アポストロス) 135 端 コリント前書 6 章 12~20 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ ぜんしよ よみ} 聖使徒パウエルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい およそ ものわれ ゆる しか およそ ものえき あら およそ ものわれ} 兄弟よ、凡の物我に許されたり、然れども凡の物益あるには非ず、凡の物我

^{ゆる しか そのいつ われ しゅ しょく はら ため はら しょく ため} に許されたり、然れども其一も我に主たるべからず。食は腹の爲、腹は食の爲なり、

^{しか これ かれ かみこれ はい み いんこう ため あら すなわちしゅ ため しゅ またみ} 然れども此と彼と神之を廢せん、身は淫行の爲に非ず、乃主の爲なり、主も亦身

^{ため かみ しゅ ふくかつ そのちから もつ われら ふくかつ あにし} の爲なり。神は主を復活せしめたり、其能を以て我等をも復活せしめん。豈知らず

^{なんぢら み えだ ゆえ われ えだ と いんぶ えだ な} や、爾等の身はハリストスの肢なるを。故に我ハリストスの肢を取りて、淫婦の肢と爲さ

^{しか あるい し いんぶ つ もの こ いったい な けだし} んか、然すべからず。或は知らずや、淫婦に附く者は此れと一體と爲るを、蓋云えるあ

^{ふたつ もの いったい な しか しゅ つ もの しゅ いつしん な いんこう さ} り、二の者は一體と爲らんと。然れども主に附く者は主と一神と爲るなり。淫行を避

^{およ ひと おこな つみ み そと あ しか いん おこな もの おのれ み おか} けよ、凡そ人の行う罪は身の外に在り、然れども淫を行ふ者は己の身を犯すな

^{あにしすや、 なんぢら み なんぢら うち おせいしん なんぢら かみ う もの でん} り。豈知らずや、爾等の身は爾等の表に居る聖神、爾等が神より受けし者の殿にし

^{なんぢらおのれ ぞく あら けだしなんぢら あたい もつ か ゆゑ ひと かみ} て、爾等己に屬するに非ざるを。蓋爾等は價を以て買われたり、故に均しく神に

^{ぞく なんぢら み もつ なんぢら たましい もつ こうえい かみ き} 屬する爾等の身を以て、爾等の靈を以て、光榮を神に歸せよ。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、すべてのことは、わたしに許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない。すべてのことは、わたしに許されている。しかし、わたしは何ものにも支配されることはない。食物は腹のため、腹は食物のためである。しかし神は、それもこれも滅ぼすであろう。からだは不品行のためではなく、主のためであり、主はからだのためである。そして、神は主をよみがえらせたが、その力で、わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう。あなたがたは自分のからだをキリストの肢体であることを、知らないのか。それなのに、キリストの肢体を取って遊女の肢体としてよいのか。断じていけない。それとも、遊女につく者はそれと一つのからだになることを、知らないのか。「ふたりの者は一体となるべきである」とあるからである。しかし主につく者は、主と一つの霊になるのである。不品行を避けなさい。人の犯すすべての罪は、からだの外にある。しかし不品行をする者は、自分のからだに対して罪を犯すのである。あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、

【 ア ril イヤ 主日第2調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

A ril I ya, A ril I ya,
A ril I ya.

誦經) ^{ねが} 願わくは主は ^{しゅ} 憂 ^{うれい} の日 ^ひ に於て ^{おい} 爾 ^{なんぢ} に聴き、^{かみ} イアコフの神 ^な の名は ^{なんぢ} 爾 ^{ふせ} を扨 ^{まも} ぎ衛らん、

A ril I ya, A ril I ya,
A ril I ya.

誦經) ^{しゅ おう すく またわれら なんぢ よ とき われら き たま} 主よ、王を救え、又我等が爾に呼ばん時、我等に聴き給え、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主 宰よ、我が 心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんと ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が 靈と體との光 照なり、我等 爾と爾の無原の父と至聖至善にし

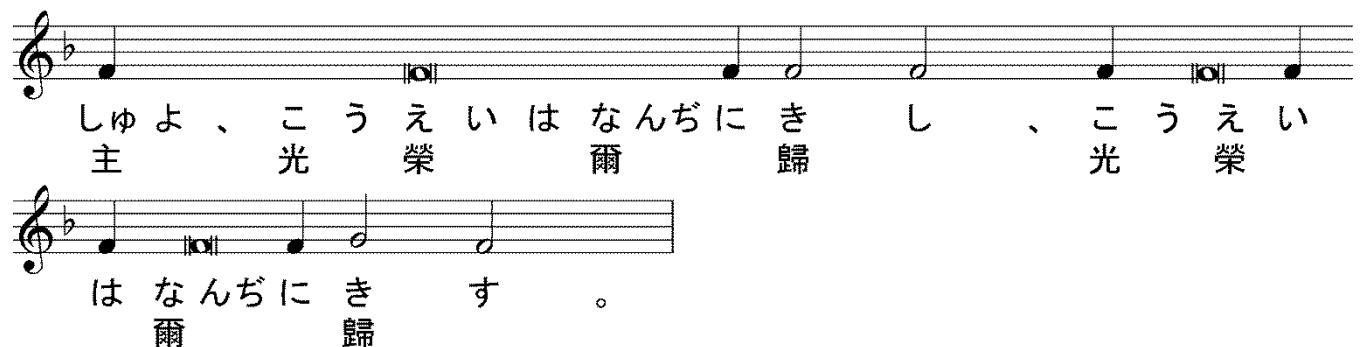
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書79端 15章11~32節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き しゅ さ たとえ もう い あるひと ふたり こ そのじしちち い} 謹みて聴くべし、主は左の 譬を設けて曰えり、或人に二の子あり、其次子父に謂え

^{ちち わ う さんぎょう ぶん われ あた ちちそのさんぎょう かれら わか いくひ へ} り、父よ、我が得べき産 業の分を我に與えよ、父其産 業を彼等に分てり。幾日も經

ざるに、次子は其得たる者を 盡く集めて、遠き地に旅行し、彼処に放蕩に生活して、
 其産業を浪費せり。 盡く耗ししに及びて、其地に大なる饑饉起り、彼始め
 て乏しきを覚えたり。 乃 往きて、其地の住民の 一に身を寄せたれば、其人彼を田に
 遣して豕を牧わしめたり。彼は豕の食う豆莢を以て、其腹を充たさんと欲したれども、
 彼に與うる者なかりき。遂に自ら省みて曰えり、我が父には幾何かの傭人の糧に
 餘れるあるに、我は飢えて亡ぶ。起ちて、我が父に往きて、之に謂わん、父よ、我天及び
 爾の前に罪を獲たり、既に爾の子と稱えらるるに堪えず、我を爾が傭人の 一の
 如く爲せと。 乃 起ちて、其父に往けり。尚遠く在りし時、其父彼を見て憫み、趨り
 前みて、其頸を抱きて、彼に接吻せり。子は之に謂えり、父よ、我天及び爾の前に
 罪を獲たり、既に爾の子と稱えらるるに堪えず。然れども父は其諸僕に謂えり、最も
 美しき衣を出して、彼に衣せよ、指環を其手に、履を其足に施せ。且肥えたる犢
 を牽きて、之を宰れ、我等食い樂しまん。蓋此の我が子は死して復生き、失われて又得
 られたり。是に於て彼等樂しめり。適其長子田に在りしが、歸りて、家に近づける時、
 樂と舞とを聞きたれば、一の僕を呼びて、是れ何事ぞと問いしに、彼曰えり、爾の弟
 來りしなり、爾の父は、其恙なくして彼を得たるに因りて、肥えたる犢を宰りたり。
 長子怒りて、入るを欲せざりき。其父出でて、彼に勧めしに、彼父に答えて曰えり、視
 よ、我多年爾に事えて、未だ嘗て爾の命に違わざれども、爾未だ嘗て小山羊を我
 に與えて、我を友と共に樂しましめざりき。然るに此の爾の子、妓と共に爾の産
 業を耗しし者の來りし時は、爾彼の爲に肥えたる犢を宰れり。父彼に謂えり、子
 よ、爾は常に我と偕に在り、我に屬する者は皆爾に屬す。惟此の爾の弟は死し
 て復生き、失われて、又得られたるが故に、我等喜び樂しむべきなり。

(比較用 口語訳) 主は譬をお話しになった。「ある人に、ふたりのむすこがあった。ところが、弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください』。そこで、父はその身代をふたりに分けてやった。それから幾日もたたないうちに、弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行き、そこで放蕩に身を持ちくずして財産を使い果した。何もかも浪費してしまったのち、その地方にひどいききんがあったので、彼は食べることに窮しはじめた。そこで、その地方のある住民のところに行って身を寄せたところが、その人は彼を畑にやって豚を飼わせた。彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであったが、何もくれる人はなかった。そこで彼は本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしている。立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください』。そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した。むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません』。しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しむうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから』。それから祝宴がはじまった。ところが、兄は畑にいたが、帰ってきて家に近づくと、音楽や踊りの音が聞えたので、ひとりの僕を呼んで、『いったい、これは何事なのか』と尋ねた。僕は答えた、『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので、父上が肥えた子牛をほふるせなさいました』。兄はおこって家にはいろいろとしなかったもので、父が出てきてなだめると、兄は父にむかって言った、『わたしは何か年もあなたに仕えて、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかったのに、友だちと楽しむために子やぎ一匹も下さったことはありません。それなのに、遊女どもと一緒にあって、あなたの身代を食いつぶしたこのあなたの子が帰ってくると、そのために肥えた子牛をほふるさいました』。すると父は言った、『子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである』」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸

※ 聖体礼儀③ (金口イオアン) へ